

井上靖

風林火山



ふう りん か ざん
風 林 火 山

新潮文庫

い - 7 - 7



昭和三十三年十二月五日 発行
平成十七年十一月二十日 八十刷改版
平成十七年十二月十五日 八十一刷

著 者 井 上 靖 いのうえ やすし

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二一八七二一

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六―五四四〇
電話 読者係(〇三)三二六六―五一一一

<http://www.shinchosha.co.jp>

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

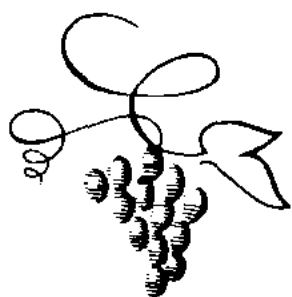
印刷・三晃印刷株式会社 製本・株式会社大進堂

© Fumi Inoue 1955 Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

新 潮 文 庫
藏 林 书 火 章 山

井 上 靖 著



新 潮 社 版

1248

風
林
火
山

一 章

青木大膳あおき たいぜんと言う三十前後の浪人者については、誰もその前身を知っている者はなかつた。今川義元いまがわ よしもとの居館いぐんのある駿府すんぶの城下へ流れ込んでから一年になるが、もと北条じょうの家臣であつたということと、素行が修まらず、何か大きな失策をしでかして主しゆうを失つたということ以外、誰も彼についての知識は持ち合わせていなかった。

今川の家臣たちも、青木大膳と道で会うと、大抵の者が彼を避けた。何かしら厭いやなものを彼はその面おもてにも姿態にも持っていた。顔は青白く、眉間みけんには傷があり、唇くちびるは薄く、歩く時長身の左肩が少し上がった。どちらかと言えば整った顔だだったが、容姿風体ようていのどこかに残忍なものがあつた。

腕は凄くすこ立った。何流の使手と言うのか知らないが、一撃で必ず相手を倒す殺気を帯おんだ素早い太刀たちの使い方だった。

この春、城内の広場で試合があり、浪人者も飛入りを許されたが、その時、大膳の腕前は抜群だった。誰も彼の右に出る者はなかった。十何人の腕自慢の武士たちが、殆ど一撃のもとに叩き伏せられた。いずれも木刀で下から胸を突き上げられ、仰向けにのけ反った。一人は血を吐き、他の全部が多かれ少なかれ手傷を負った。浪人者青木大膳の名は、その時以来相当有名になったが、今川家からは仕官の沙汰はなかった。それだけの腕を持ちながら、何となく信用されぬ、人から疎まれるようなものを彼は身につけていたのである。

その日、青木大膳は暮方、彼が食客となっている屋形町の一軒の武家屋敷を出た。玄関口を出る時、小者が何か言葉をかけたが、いつものように返事をしなかった。小者はその家の主人の帰宅を知らせたのであるが、彼は聞えたのか、聞えないのか、不貞腐った歩き方で裏木戸の方へゆつくりと足を運んだ。裏木戸へ廻ったところを見ると、小者の言葉が耳に入り、主人と顔を合わせるのを避けたのかも知れない。

半刻程経った頃、彼は安倍川のほとりを、やはり同じ歩き方で歩いていたが、やがて川が大きく屈曲しているとところから堤を下に降り、二、三軒の農家の背戸を通って、竹藪の横手の破れ寺に入って行った。

「居るか」

玄関の板敷のところで低く声をかけたが、返事のないのを知ると、そのまま木戸を開けて狭い中庭へ廻った。雑木が植わり、飛石がごちゃごちゃと配せられてある。「居るか」彼はまた声を掛けた。部屋の内部に人の気配があるのを知ると、彼は縁側に腰を降した。

「誰だ」少し囁れた低い声がした。

「青木大膳だ」

彼は横柄おうへいに答えた。内部からは、それに対して返事はなかった。

「青木大膳だ」

また彼は言った。眼めは、この二、三日急につめたい光を帯んで来た陽ひに耀かがやいている庭の雑木に当てられたままである。

と、傍そばでかちりと音がした。見ると小判が一枚、彼の腰かけている傍に落ちている。彼はそれを手に取ってちらっと眼を当てた。面に塵目ごごめがあつて、下に桐きりの極印ごくいんして、その内側に駿河するがの文字がある。

「一枚か」

青木大膳は鼻でせせら笑うと、

「騙かたり者奴ものめが！」憎々しげに言った。

「武者修行が聞いて呆れる。諸州を経廻り、国々の風俗を知り、要害の絵図を調べ、地理に能く通達しか！」

それから大膳は、言葉の調子よりずっと低い声で笑った。輕蔑の氣持がむき出しにされた厭な笑いだった。彼は平生めつたに口をきかず、無口で通っていた。併し、ここでは、彼の方ばかりが口をきいている。

「騙り者奴が！兵法とはよくぬかしたな。城取り、陣取り、兵法の奧秘を極める。その上劍術は行流の使手か！行流というものの腕前を見せて貰いたいものだ。いつでも青木大膳、相手になつて遣わす」

依然として、内部からは何の返事もなかった。すると、いきり立ったように彼は言つた。

「もう一枚出せ！同じ浪々の身でも、貴様の方は、世人をたぶらかして、俺に較べるとずっと工面がいい。もう一枚出せ！」

すると、障子の隙間から投げられたのであろう、また一枚の小判が、小さい音をたてて縁に落ちた。

「貰つて行く。騙り者の面の皮をひんむくのは、十日程伸ばしてやる」
青木大膳は立ち上がった。それから、

「今日は急ぐ。夜、甲斐^{かい}の武田の重臣に会って身売りの交渉をせねばならぬ。駿府の城には愛想^{あいそ}をつかしたわい」

棄台詞^{すてぜりふ}を残して、青木大膳が二、三歩歩き出した時だった。

「待て！」

と、噎れた声がかかった。

「何か用か」

「武田の重臣と言ったな。誰だ？」

「おぬしも気になると見えるの。侍大将板垣^{いたがき}某^{なにかし}。名前などは知らん」

すると、暫く間^{しばら}を置いてから、

「やすやすと仕官ができと思っているのか」

噎れた声は言った。

「そんなことは知らぬ、当ってみるまでだ」

青木大膳が更に二、三歩歩いた時だった。障子が開いて、膝行^{いぎ}するようにして出て来たのは、ひどく小柄^{こがら}な人物だった。顔つきから体つきまで全部異様だった。

「用か？」

青木大膳は振り返った。

「智慧ちえを授けて遣わす——いいか、板垣のぶかたと言え、板垣信方であろう。代々板垣は武田家の族臣で重きをなしている。現在、甘利虎泰あまりとらやすと板垣信方とを、武田家の両職となす。浪人者の売り込みなどにうかうかと乗る人物ではない。ただ一つ方法があるだけだ。いいか、貴公、その板垣信方を襲え！」

「襲う!? 襲って、何とする！」

「知れたことだ。貴公が襲って危いところを拙者が救う」

青木大膳はその相手の言葉の意味が、急には呑み込めなかった。すると、小男のこの家の主人はまた続けて言った。

「それで拙者と板垣信方とは、ある関係ができる。人間、生命いのちを助けられるより大なる恩義はないからな、拙者も武田家に仕官を望んでいる。拙者が武田に迎えられる時、俺は貴公をも推薦する」

「芝居か」

青木大膳はぱつと唾つばを吐き、それから相手を見詰めた。

「併し、これ以外、確実な仕官の道はあるまい」

「騙だまり者奴！」

「嫌いやなら行くがいい」

青木大膳は暫く考えるようにしていたが、やがて縁側の方に引き返して来ると、
「本性を現したな。めっかち！」

縁側に端坐たんざしている人物の眼はなる程すがめである。どこを見ているか判わからない。
大膳が縁側の方に戻もどつて来ると、縁側の人物は右手を縁側について腰を上げた。縁
に当てた手の中指が欠けている。やがて、すうっと立ち上がったが、ひどく背が小さ
かった。到底五尺はない。小男は座敷に入った。

青木大膳は傍若無人に笑った。が、座敷に入った人物は笑わなかった。少し暗い部
屋内で庭の赤い菊の花の方にいつまでも顔を向けている。併し、大膳は相手がどこを
見詰めているか確しかとは判らなかつた。

「人を傷いためぬように襲うのは、ちと難しいのう、青木大膳、初めてじゃ」
彼は言つたが、部屋の人物は再び前のように口をきかなくなっていた。

「何とか言え！ 言わぬか、山本勘助やまもと かんすけ！」

激情に襲われて、大膳は大喝だいかくした。蒼白そうはくな顔が急にひき攣つつた。

「少々傷めてもいい、ただ殺されては困る。もとも子もなくなる！」

部屋からは、落着いた噺れた声がかかった。

青木大膳は山本勘助が嫌いだった。半年程前初めて会った許りだが、その時からこの人物を憎んでいた。性が合わないと言っても言うか、この男の声を耳にすると、むしろ、相手を苛めて苛めて苛め抜き、ぐうの音も出ないようにしてやりたい欲望を感じた。従って、大膳が山本勘助の家を訪ねるのは金の無心もあつたが、それより訪ねて行く心の底には、むしろ彼に厭がらせを言う欲求の方が強く働いていた。

浪人山本勘助の名は、駿遠参の今川家の領地では相当広く知れ渡っていた。参州牛窪の浪人で、駿府へ来たのは、九年前である。この九年間に度々今川家へ仕官を申出ているが、どういうものか、未だに採用されず、現在は、今川家の家老庵原忠胤の庇護を受けて徒食している。庵原忠胤が長年に亘つて勘助に米塩の資に事欠かぬだけの面倒を見ているのは、勘助と忠胤が親族関係であるからだ、と、世間では取沙汰している。若しそうでなければ、今川家で仕官も許されないと、謂わばその人物も器量も認めない者を、家老の忠胤が面倒を見る筈はないと言うのである。

剣は行流の使手で、今川家の家臣の中で彼に立ち向えるものはないと噂されている。併し、誰も実際に彼が剣を執つたのを見たこともなければ、戦場に臨んだ話も、人を殺傷した話も聞いていない。恐らくこの行流の使手であるという噂の蔭には、彼の異相がかなり大きい役割を勤めていると思われる。

身長は五尺に充たず、色は黒く、眼はすがめで、しかも跛である。右の掌の中指を一本失っている。年齢は既に五十歳に近い。

彼が己が家を出て城下を歩くことは、一年のうち数える許りであるが、そんな時幼童は振向くが、大人は振返らない。彼の無慚な面貌風姿は、ある不気味さと痛々しさを兼ね備えている。幼童も振向くだけで、さすがに怖いのか彼のあとをついて歩くことはしない。

彼は、二十歳の時から全国各地を経廻り、軍旅に長じ、古今の兵法に明るく、城取り、陣取りの達人とされている。それにも拘らず、今川家仕官の儀が成立せず、九年も浪々の身であることは、むしろ逆に彼の盛名を高からしむるに役立っている。彼の頭脳と経験と才気をそねむものが府中の屋形様（義元）の側近におり、その勢力に依って、彼の仕官は執拗にはばまれているというのが、一般の取沙汰である。近年はその妨害者が彼の庇護者庵原忠胤その人であるという噂さえ生れていた。

併し、兎に角、今川の家臣の者でも、こつそりと山本勘助の家を訪ねる者は少なく、夜になると、彼の居宅は宛ら私塾の觀を呈すると言われている。

ただ青木大膳だけは、山本勘助に関するあらゆる風評を信用していなかった。騙り者め！彼はそう思い込んでいた。併し青木大膳は、山本勘助の盛名のあらゆる要素

を分析して、それについて疑惑の眼を向けているわけではなかった。彼が山本勘助を信用していないのは、彼の直感に依つてであつた。山本勘助が、刀を執つて立ち上がっている姿は、どうしても彼の眼に浮かんで来なかつた。むりに思い浮かべると、それは颯爽としたところの微塵もない、頗る珍妙なものであつた。

青木大膳が山本勘助に初めて会つたのは、半年程前であるが、一目彼を見た瞬間から、彼はこの人物を信用しなかつた。劍の使手という者は、こんな人物ではないと思つた。彼と一度仕合して化けの皮をひんむいてやりたいと思つた。大膳は何回か勘助に劍を執らせようとしたが、絶対に相手は彼の要求に応じなかつた。その度に、何だかんだと器用にはぐらかされて、逃げられていた。

大膳は、時々、思い出したように山本勘助の家を訪ねて悪口雑言を吐いた。それでも勘助は黙っていた。勘助に対する蔑みと憎しみが、青木大膳には、いつか浪々の貧しい退屈な生活の中での、唯一の生き甲斐のようなものになっていた。兵法や諸国の事情については、大膳自身何の知識も持合わせていなかったもので、それについての評価を試みることはできなかったが、併しこの方も劍の腕前と同じことであらうと思つた。一兵一卒を持たずして何の城取り、陣取りであるか！ 全国を旅して歩いたというが、それも怪しいものである。一度大膳自身が生れた小田原付近の地理人情につい

て質問したことがあったが、勘助は口を噤^{つぐ}んで一語も発しなかった。全然知っていないと見るより他^{ほか}はなかった。

青木大膳は、今日ゆくりなくも山本勘助が彼にぺてん師としての本性を示したことが、満足だった。安倍川の堤を、大膳は、いつもの場合とは違って、足ばやに歩いてきた。

板垣信方を襲うということが、たとえそれが一つの芝居であるとしても、彼から久しぶりで退屈さを取り上げていた。ぺてん師め！世をうまく欺^{あざむ}き通しているが、俺だけは欺けなかったではないか！

彼の歩いて行く道の片側は安倍川の磧^{かわら}、片側は一段低くなって、そこには耕されていない田野が荒^{ひろ}がっていた。今年は米は出来まい！この思いが、急に青木大膳の心を暗くした。米のこととなると、問題は切実だった。それでなくてさえ年々百姓が土地を棄^すてて流民になって行き、田を耕す者は少なくなっている。今年はこの月の上旬、十日間に亘^{また}って、大雨が降り続いた。京都から東はどこも大変な水害である。この地方だけでもこの安倍川の川筋で流れた家の数は知れなかった。田圃^{たんぼ}も流れ、馬や牛も海へ向って流れた。昨天^{てん}文九年にも、春に一度と、今年より少し遅れて秋口に一度大風雨があった。年々厭なことが続いて起っている。